

国技の未来

総括主任研究官 加藤 秀生

綱取りは逃したものの、今年の大相撲一月場所で、大関琴奨菊が日本出身力士として10年振りに幕内最高優勝を果たした。官房長官が記者会見で感想を問われ、「国民の皆様も待ちに待った優勝だと思う。」と述べられる出来事であった。「日本出身力士」との表現は、日本国籍を取得していたモンゴル出身の旭天鵬がこの間に優勝したからである。国技と呼ばれる競技だけに日本人という点が話題になる。

相撲が国技と呼ばれるようになったのは、明治42(1909)年に大相撲の常設興行館を建設した時、相撲界が国技館と名付けて以来といわれる。いわば自称である。現在、大相撲を開催している公益財団法人日本相撲協会の定款には、「この法人は、太古より五穀豊穡を祈り執り行われた神事(祭事)を起源とし、我が国固有の国技である相撲道の伝統と秩序を維持し継承発展させるために、本場所及び巡業の開催、これを担う人材の育成、相撲道の指導・普及、相撲記録の保存及び活用、国際親善を行うと共に、これらに必要な施設を維持、管理運営し、もって相撲文化の振興と国民の心身の向上に寄与することを目的とする。」とされている¹。この相撲の定義にはいろいろ異論もあるが、少なくとも日本の国技相撲は、今や国民的、あるいは国際的コンセンサスではないかと思われる。

いま両国国技館に大相撲観戦に出かけると、外国人観客の多さに驚くことになるだろう。JR両国駅の国技館方面出口コンコースには、横綱白鵬などの優勝額が飾られ、国技館に向かう沿道には相撲をデザインしたTシャツや小物などを商うテントが軒を並べ、国技館前は力士の出待ち・入り待ちの人であふれているが、そこかしこに外国の方がおられる。相撲部屋も多く、大相撲興行中、力士が頻繁に行き交う両国界隈は、江戸情緒を感じさせる貴重な観光資源であるが、最も重要なアイテムは、生きているサムライ、力士である。常時、和服・髷で過ごす日本人は、もはや彼らくらいしか残っていない。彼らはアスリートであるとともに、日本文化を体現する観光資源そのものなのである。

外国人観客といえば、東京オリンピック・パラリンピック(以下「東京五輪」、「五輪」と略称する。)の開会まで5年を切り、五輪準備は「待ったなし」の段階に入っている。国土交通省でも、首都圏空港の機能強化、首都圏三環状道路等の整備や渋滞ボトルネック対策の推進、鉄道駅・道路空間等のバリアフリー対策の強化、臨海部の防災機能の強化等、五輪とその先を見据え、推進すべきことが沢山ある。大相撲は国際化しているものの、相撲と五輪の関係はどうだったのか。

実はアマチュア相撲界も、五輪を目指した国際化の道を進めてきた。アマチュアの団体である日本相撲連盟の役員を長くつとめられている櫛原利明・参議院法務委員会専門員によれば、同連盟は、国際相撲連盟の設立(1992年。現在は加盟84カ国)、世界選手権の開催(男子は1992年から、女子は2001年から)、国際オリンピック委員会(IOC)への加盟(1998年に暫定承認団体)と施策を打ち、IOC加盟に当たって男女平等種目であることが条件付けられたので、積極的に女子相撲の普及

にも取り組んだとのことである。また、このように国際化の道を進んだのは、国内競技人口の増大を図る目的で、大相撲に入って出世するだけでなく、一般にあまり知られていない体重階級制があるアマチュア相撲で、五輪で金メダルを取るという夢を用意することにより、相撲人口の減少に何とか歯止めをかけようとしたとのことであるⁱⁱ。現実世界選手権では、多くの中・軽量級チャンピオンが誕生している（表1及び2）。

表1 世界相撲選手権での国別金メダル数（第1回(1992)～第20回(2015)）

	日本	モンゴル	ロシア	ドイツ	ブラジル	ウクライナ	ポーランド	ハンガリー	ブルガリア	アメリカ	ジョージア	南アフリカ	計
無差別級	7	4	4	2	0	0	0	0	0	1	1	1	20
重量級	12	2	2	1	0	0	2	1	0	0	0	0	20
中量級	14	0	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	19
軽量級	8	4	0	1	3	2	0	1	1	0	0	0	20
計	41	10	10	4	3	3	2	2	1	1	1	1	79

中量級は第1回大会に設けられていないため、メダルの数が19である

（出典）国際相撲連盟資料等から作成

表2 世界女子相撲選手権での国別金メダル数（第1回(2001)～第11回(2015)）

	日本	ロシア	ウクライナ	ドイツ	ポーランド	モンゴル	ブラジル	ベラルーシ	ノルウェー	計
無差別級	2	6		2	1					11
重量級		5	2	1		1	1	1		11
中量級	2	5	2		1	1				11
軽量級	2	4	4						1	11
計	6	20	8	3	2	2	1	1	1	44

出典）国際相撲連盟資料等から作成

肝心の五輪参加については、昨年、五輪開催都市が提案できる追加種目入りを目指して、各競技団体がアピール合戦を繰り広げたことはまだ記憶に新しい。書類審査による1次選考の後、昨年9月に、野球・ソフトボール、空手、ローラースポーツ（スケートボード）、スポーツクライミング、サーフィンの5競技について、大会組織委員会がIOCに実施を提案する旨が発表されている。今年8月のIOC総会で最終決定がなされる予定である。国技・相撲は、第1次書類選考で落選した。種目追加検討会議の座長は1次選考のポイントについて、「特に若者におけるスポーツの価値の向上とレガシー（遺産）の形成、国民の（五輪）機運の盛り上げに資するもの」と語られ、9月の最終選考時には、野球・ソフトボールの選出について「国民的スポーツで観客の動員力もある」と理由を述べられたと報道された。なお、昭和39(1964)年東京五輪では、武道の一種目としてデモンストレーション競技が行われている。

野球に対する「国民的スポーツ」という評価との差は、端的には、アマチュア相撲界の努力にもかかわらず、現実の競技人口の差に求められるだろう。競技人口の減少は、国技相撲にとって深刻な問題である。グローブを付けた経験をした方は沢山いらしても、太田前国土交通大臣のように実際に廻しを締めたご経験のある方には、まず出会えないのが現実である。

最近の大相撲界への人材供給は、大まかにはアマチュア相撲界と外国勢によっていると言ってよい。先頃大阪で行われた春場所の幕内番付をみても、42人中外国出身力士が14人、大学相撲部出身力士が13人である。残った15名の中にも大関琴奨菊や豪栄道、小結栃煌山を始め高校相撲部出身者がいるから、国内アマチュア相撲界の縮小は、大相撲界の人材供給を細らせ、日本出身力士の優勝可能性を萎ませていくことは容易に想像できよう。

平成28年春場所番付

東			西		
日馬富士	モンゴル	横綱	白鵬	モンゴル	
鶴竜	モンゴル	横綱			
琴奨菊		大関	稀勢の里		
豪栄道		大関	照ノ富士	モンゴル	
嘉風	日体大	関脇	豊ノ島		
栃煌山		小結	宝富士	近畿大	
琴勇輝		前頭筆頭	高安		
隠岐の海		前頭二	栃ノ心	ジョージア	
碧山	ブルガリア	前頭三	安美錦		
勢		前頭四	蒼国来	中国	
旭秀鵬	モンゴル	前頭五	松鳳山	駒澤大	
妙義龍	日体大	前頭六	正代	東京農大	
豪風	中央大	前頭七	魁聖	ブラジル	
直ノ岩	モンゴル	前頭八	千代大龍	日体大	
豊響		前頭九	佐田の海		
臥牙丸	ジョージア	前頭十	玉鷲	モンゴル	
逸ノ城	モンゴル	前頭十一	阿夢露	ロシア	
徳勝龍	近畿大	前頭十二	英乃海	日大	
千代鳳		前頭十三	御嶽海	東洋大	
大翔丸	日大	前頭十四	大栄翔		
里山	日大	前頭十五	北太樹		
明瀬山	日大	前頭十六			

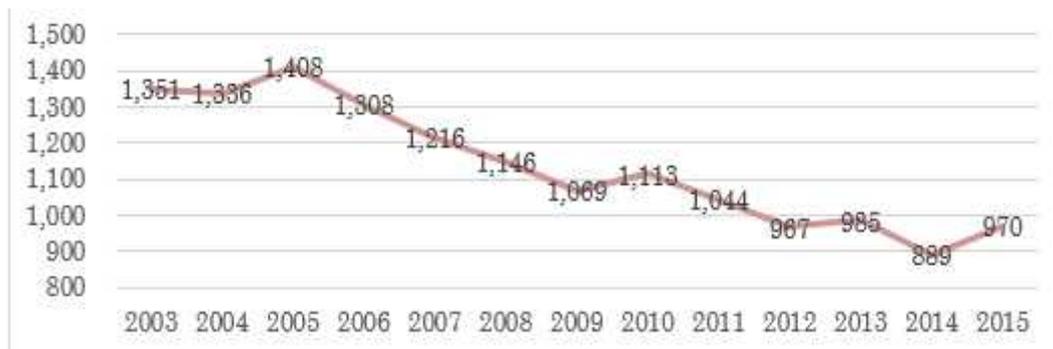
事実、公益財団法人日本相撲協会の事業報告書で把握できる11月場所時点での力士数は、大相撲界での不祥事による影響があるのを差し引かないといけないが、平成20(2008)年の691名から、平成26(2014)年には634名へと8%強減少している。

この点に関して、インターハイを主管する公益財団法人全国高等学校体育連盟(高体連)が公表している高等学校運動部に係る統計資料から近10年程度の各競技の部員数の動向を見てみたい。インターハイ参加競技でない野球については、公益財団法人日本高等学校野球連盟(高野連)の公表数字を参照する。同様にインターハイに参加していないゴルフやアメリカンフットボールなどは、適当な公表数字

が見つけられず、残念ながらここでは触れられない。なお、ここ10年間の高校生は、東京五輪時に、概ね20歳から35歳に相当するから、五輪では中心的存在として活躍が期待される選手層に相当するだろう。

さて、相撲については、平成15(2003)年には高等学校213校に1351人の相撲部員がいたが、平成27(2015)年には172校970人へと減少している。

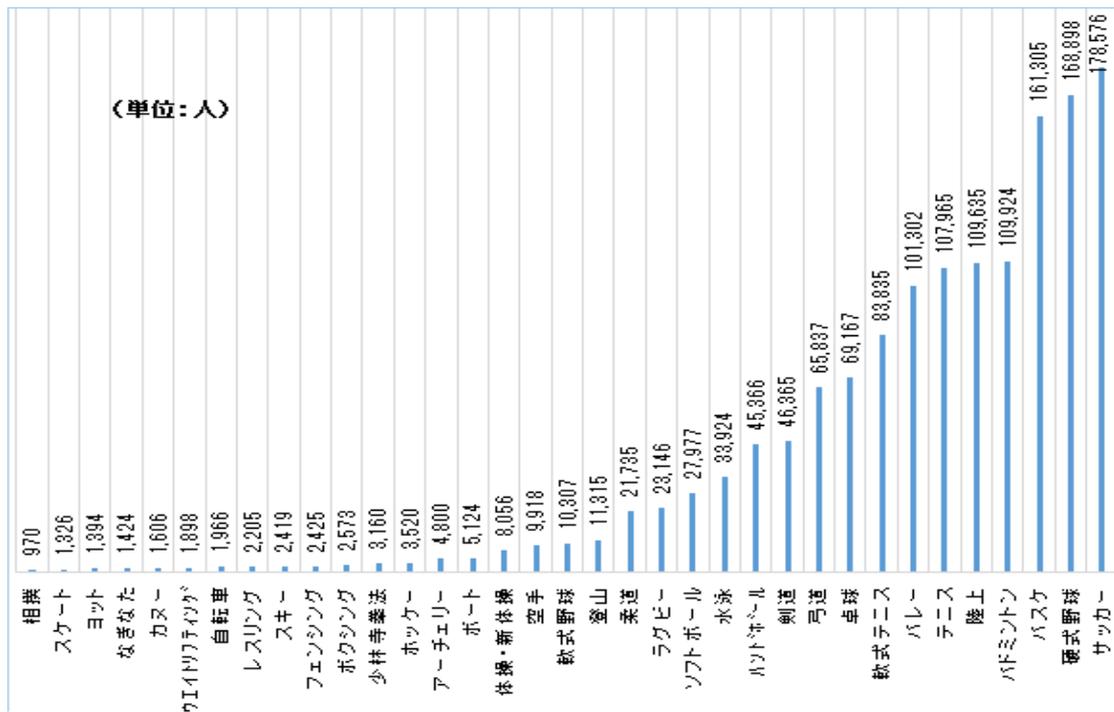
図1 高等学校相撲部部員数



(出典) 高体連・高野連資料から作成

なお、平成27(2015)年時点での高等学校の運動部に所属する部員数は次のとおりである。(本稿で「運動部」というときは、図2の各部を総称している。)

図2 高等学校運動部の部員数(2015)



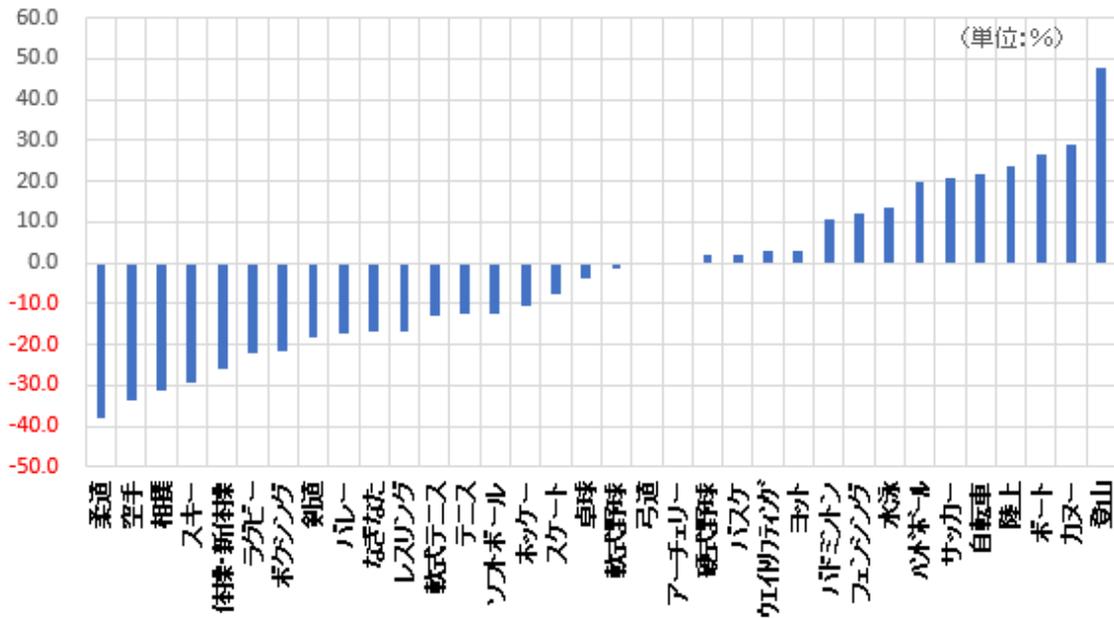
(出典) 高体連・高野連資料から作成

文部科学省の平成 27 年度学校基本調査統計による高等学校の学生数（全日制+定時制）を用いて、これを高校生 1 万人当たりの人数に換算してみると、一番多いサッカー部で 538 人、以下、硬式野球部 508 人、バスケットボール部 486 人となり、約 20 人に 1 人の規模。これに次ぐグループが、最近世界的選手を輩出しているバドミントン 331 人、陸上 330 人、テニス 325 人、バレーボール 309 人であり、30 人に 1 人程度。水泳は 102 人と 100 人に 1 人程度である。武道・格闘技系についてみよう。弓道は 198 人と高校生 50 人に 1 人程度であり、ほかには剣道 139 人が水泳より多くの部員を擁するが、柔道 65 人、空手 29 人と少なくなり、ボクシング 7 人、レスリング 6 人、相撲に至っては、高校生 1 万人に対する相撲部員が、わずか 3 人弱である。

次に 10 年間の動きを見よう。平成 17 (2005) 年から平成 27 (2015) 年までの間に、運動部員数は、約 144 万 3000 人から約 143 万人へと約 0.9%減少しているが、学校基本調査統計による高等学校の学生数（全日制+定時制）は、2005 年（平成 17 年）から 2015 年（平成 27 年）までの間に約 360 万人から約 331 万人へと約 7.9%減少している。このため、高校生 1 万人当たりの運動部員数は約 4000 人から約 4300 人へと約 7.6%増加している。

少部員の運動部でも登山・カヌーなどは伸ばしているが、武道・格闘技系の旗色がよくない。弓道は善戦しているが、下から 3 つは柔道、空手、相撲といずれも対人競技の武道で、20%を上回る減少である。同系統の剣道、薙刀も 10%以上減らしている。

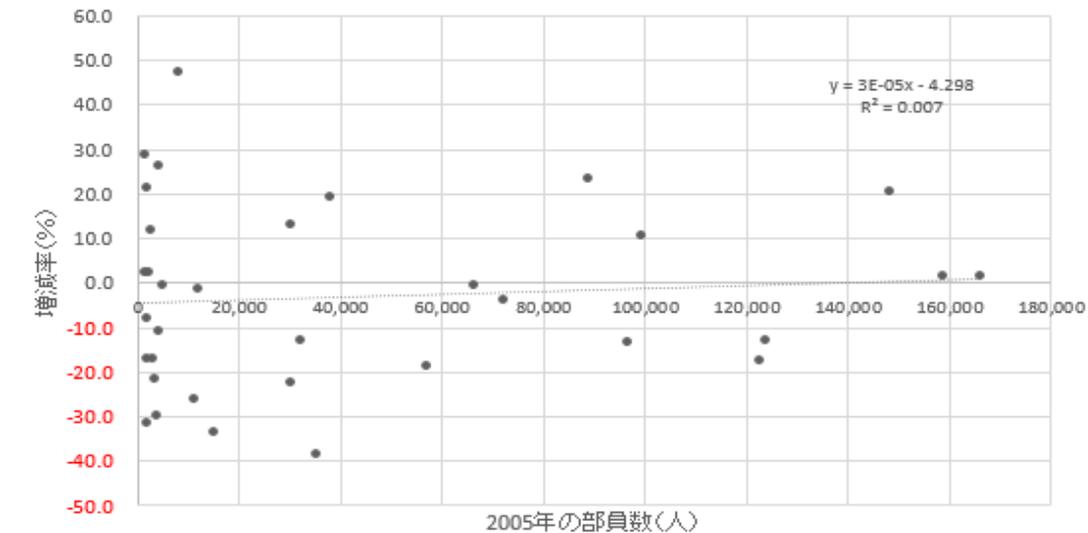
図3 運動部員の増減率(2015/2005)



(出典) 高体連・高野連資料から作成

ただ、部員数の多寡とその後の増減の間では、相関はみられない ($r=0.083$ 、図4) から、部員数が少ないことをもって、いたずらに将来を悲観することはない。

図4 高等学校運動部の部員数(2005)と10年増減率(2015/2005)



(出典) 高体連・高野連資料から作成

今年の正月に、これも今や国民的スポーツの感がある箱根駅伝競走を連覇した青山学院大学の原晋監督が、優勝の翌日、箱根駅伝の改革私案を披露した旨の報道があった³⁾。陸上界の注目度を高め、人気スポーツの野球やサッカーに対抗しようという思いからの提言であると紹介されていたが、こうしてみると、いわゆる勝ち組の中での人材の奪い合いである。

さて、実技相撲はなぜ嫌われるのか、太ることと裸になることが二大理由とよく言われる。しかし、筆者のささやかな経験からいうと、相撲はバランス崩しのコツと関節技が幅をきかせる格闘技で、ただ体重を重くすれば良いというものでもない。現実に関の大相撲界を見ても、重すぎるせいで競技上大きなハンデとなる怪我を負う力士が少なからずいると見ている。アマチュア相撲には体重階級制の試合があるのは前述したが、競技の裾野が広くない現状だけに、軽いクラスなら、大学レベルでも「日本一」を手にする機会があるという魅力がある。裸の問題については、女子選手が参加するアマチュアでは疾うに解決されていて、国際大会では、男子でも着衣の上に廻し姿が普通にみられる。レスリングのシングレットなどを着用する例が多い。

このような普及のための処方箋は、最近二十年程の間にアマチュア相撲関係者が講じて来た施策である。したがって減少が止まっていないのは、浸透が始まったところで効果が出ていないという見方もできる。大学や高校の女子相撲選手にフォーカスを当てた番組が放映されるなどの動きも出てきている。フォークリフトのCMに大学の女子選手が起用されていることに気づかれた方もおられよう。

また、武道については中学1、2学年の保健体育で必修とされたという明るい材料がある。これは、平成18(2006)年12月改正の教育基本法に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が教育の目標として規定されたことに伴う措置である。平成20(2008)年1月の中央教育審議会答申において、「武道については、その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善」することと示されたことを受け、中学校学習指導要領が改訂された。

この措置は、平成24(2012)年度から実施されたのだが、こと相撲については、指導者や設備不足のために導入する学校数は多くないと聞く。こうなると、国内における相撲の実技経験者減少傾向については、負の連鎖が続く状況にもみえる。実力の世界だけに世襲制による維持は困難度が高い。

東京五輪で、両国国技館はボクシング会場となることが予定されている。自国開催五輪で国技館と銘打つ施設を他競技の用に供するだけというのも寂しい。ボクシングがパラリンピックの種目ではないことから、オリンピック後



に、本来地方で行っている巡業を国技館で行い、取組以外に大相撲の持つ伝統的要素も披露しては、という日本相撲協会の考えがあるようである^{iv}。

ボクシングも近年女子への普及が進んで、ロンドン五輪では3階級でボクシング女子の競技が行われた。国技館では各種格闘技が行われ、女子の試合も行っている。

方や、国技館の土俵に女性は上がれないとされている。この見解のため、わんぱく相撲大会では、地方大会は女子が参加できても、地方大会を勝ち抜くことで出場資格を得る全国大会には、その会場が両国国技館であるために女子が参加できない。この見解、当時の社会情勢や相撲の状況などを背景に、相撲界の地位向上・生き残りを企図して虚構されたものとの研究がある。しかし今や普及上の妨げになっている。

本報第58号で「標識・サインを活用したプッシュ型情報提供検討協議会」による避難実験の概要について紹介した。この実証実験では、横須賀市久里浜の「ペリー公園」を避難のスタート地点として実施したが、この公園は1853（嘉永6）年7月に黒船で来航したペリー提督が初めて上陸した場所に整備されている。ペリーは、久里浜では大統領国書を渡してすぐに帰航したが、翌年2月に再訪、横浜に上陸して日米和親条約の交渉を行っている。この横浜での外交交渉に当たり、日本側贈呈品の運搬に活躍したのが、時の人気力士大関小柳らであったという。米俵二俵(120kg)を抱えて運び、稽古相撲も見せ、ボクサーやレスラーであった乗組員を相手にしたともいう^v。このエピソードは、専ら日本側の記録に残り、アメリカ側にはあまり残されていないため、アメリカ側には軽視されたという評価もあるようだが、圧倒的に軍勢力が劣る中で、国難局面で、実戦には直結しない相撲を外交上の示威行動として採用したのは、政府の選択として見た場合、まずまず合理的ではあるまいか。この力士の起用、相撲界側から上申されたものという^{vi}。

第二次世界大戦後、GHQ 指令による武道の禁止の際も、相撲は例外であった。相撲界は戦中に野球が適性競技として弾圧を受けていたときには、その精神性、武道の精神を強調して生き残り、戦後は、そのスポーツ性や娯楽性を強調して生き残ってきた。

相撲史の研究で著名な新田一郎東京大学大学院法学政治学研究科教授は、武道と相撲と関わりについて次のように説く、『相撲は、ときに「武道」という装飾をまといながらも、非常に早い時期から、実戦的な闘技でも、信仰心をともなう孤独な修行の道でもなく、観客の存在を前提とした鑑賞にたえる技芸として成立し、洗練されてきたのである。（中略）相撲はそのときどきの社会情勢によって人びとの支持を求めてさまざまに装飾をかえてきた。』^{vii}。

このように相撲界は生き残りや地位向上のために、時々の社会情勢に合わせ様々な工夫をして生き延びてきた。その大きな一つが自ら国技館と名付けた施設であり、また、近時の国際化である。大記録を打ち立てた外国籍横綱も生まれた。沢山の外国人観客を招き入れ相撲場に活気を生んでいるのも、大相撲界が国際化を進めてきたことが大きく寄与しているだろう。古くは大名が地元の力自慢をお抱え力士にして競わせ、今でも力士の場内紹介の際には出身地を明らかにする。かつてはどこの地方出身であるのか、が関心であったのが、今やどの国家出身であるのかを問題にしているだけなのかもしれない。近い将来、日本相撲協会の幹部となるのに、日本国籍を必要としない時代が来るかもしれない。

先頃、さらなる観光立国の推進のため、スポーツ庁、文化庁及び観光庁が包括的連携協定を締結した。三庁の政策連携では、新たに生まれる地域ブランドや日本ブランドを確立・発信し、2020年以降も訪日観光客の増加や、国内観光の活性化を図り、日本及び地域経済の活性化を目指す。冒頭述べたように、現在も和服・髷で過ごしている力士は、アスリートであるとともに、日本文化を体現する伝統芸能の担い手でもあり、訪日観光客に対する集客力を持っている。悲観的な材料が多いように見える相撲界の未来だが、また新しい立ち位置が生じているようにも思われる。

どんな社会システムの変革であろうとも、柔軟に対応できないプレイヤーが生き残るのは難しい。しかし融通無碍な相撲のことで、結構強かに生き残っていくのではないかと思う。また日本の文化的土壌には相撲を求める根が張っているように思われもする。これまでも危機を乗り越えて、今なお黒船到来当時のように、力士は髷姿でいる。「国技」というのは後付けの智慧であったとしても、その姿は、海外の事物を取り入れながら柔軟に変化を続けつつ生きてきたわが国と重なるところがあるようにも見えるのである。

-
- i 国技を称するのは相撲だけではない。野球選手と球団との契約の際に用いられる、いわゆる「統一契約書」の前文（2015年版）には「わが国のプロフェッショナル野球を利益ある産業とするとともに、不朽の国技とすることを契約者双方堅く信奉する。」とある（日本プロ野球選手会公式ホームページ http://jpbpa.net/up_pdf/1427937937-107764.pdf）。
 - ii 榎原利明「オリンピックで我が国技を」（立法と調査 369号（2015年10月1日）。参議院法制局）
 - iii 日刊スポーツ 2016年1月5日
 - iv 毎日新聞ほか 2016年2月23日
 - v 吉崎祥司・稲野一彦「相撲における「女人禁制の伝統」について」（北海道教育大学紀要第59巻第1号 北海道教育大学学術リポジトリ <http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/933/1/59-1-zinbun-06.pdf>）
 - vi 加藤祐三「幕末外交と開国」（講談社学術文庫）P190、201～202
 - vii 加藤 同 P173
 - viii 新田一郎「相撲の歴史」（山川出版社）P288～289